

英語活動に関する小学校教員の意識調査¹⁾

猪井 新一*

(2009年9月15日受理)

A Survey of Primary School Teachers' Attitudes toward Implementation of English Activities

Shin'ichi INOI

キーワード: 小学校英語活動, 外国語活動, コミュニケーション, 海外渡航

本研究の目的は小学校教員の英語活動に関する意識調査を報告し、小学校英語活動の教員研修はどのようなものが望ましいかについて提案することである。41名の小学校教員へのアンケート調査への回答を分析した結果、3~4割の教員は英語活動を実施した経験が全くなく、実施する場合はほぼTTで行われ、半数以上が英語活動は負担に感じていることが分かった。アンケート結果を回答者の海外渡航歴期間の観点から分析すると、海外渡航期間が長い教員は短い教員と比較すると、より積極的に英語活動に参加しているのがわかった。教員の英語活動導入に関する不安は、自分の英語力、年間指導計画、学習指導案、指導法に関するものが上位を占めた。小学校英語活動のための教員研修は教員自身が英語はコミュニケーションの手段であることを体験的に認識できるようなものでなければならない。

はじめに

教員免許状更新講習会は平成20年度の試行を経て、平成21年度より本格的に実施されている。茨城大学もその任を担っており、平成23年度からの「小学校外国語活動」の必修化に対応するために、その講習会に「小学校英語」の講座が新領域分野の一部として設けられ、筆者がその講座の一部を担当することとなった。この講座の内容を検討するにあたり、小学校の先生方が英語活動²⁾について実際にどのような考えをもち、またどのような教員研修内容を望んでいるかについて調査するために、15項目からなるアンケート調査を実施した。本論の目的は1)この調査結果を報告すると共に、2)小学校英語活動に向けての教員研修はどのようなものが望ましいものであるかについて提案をするものである。

*茨城大学教育学部英語教育講座 (English Department, College of Education, Ibaraki University, Mito, Japan)

平成 21 年度からの英語活動の必修化に向けて喫緊の課題は英語活動を担当する教員の研修をどのようにするかである。これまでほとんど英語を教えた経験のない小学校教員が週一回の英語活動を担当するというのは相当の不安を煽り、実際に物理的、精神的に負担を強いることになる。木塚 (2009, pp. 11-12) も小学校英語活動を担当する教員養成も含め、現職教員教育が緊急の課題であると、教員研修の重要性を指摘している。茨城大学で実施される教員免許状講習会の数時間の教員研修講座を通して、小学校教員の不安感をすべて解消できるとは思わないが、少しでも英語を苦手とする小学校教員が前向きに英語活動に取り組むことができるような態度を培いたい。

本研究ではアンケートへの回答結果を主として、海外渡航期間の長短および英語の好き・嫌いの観点から分析する。これまでの小学校英語活動の研究の中にはその課題や問題点を扱ったものはあるが(安達 2004, 大年 2008, 木塚 2009, ベネッセ教育開発センター 2006 等) 小学校教員の海外渡航の有無や渡航期間の長短の観点からは分析してはいない。

アンケート内容および調査方法

アンケートは二部構成(Part 1 および Part2)であり、Part1 は回答者の背景的情報(性別、年齢、担当学年、海外渡航歴の有無およびその期間、英語資格試験受験の有無および資格試験名)に関するもの 7 項目、Part 2 は小学校英語活動担当の有無や小学校英語活動に対する考え方に関するもの 8 項目(うち 1 項目は自由記述)である(資料参照)。平成 20 年 12 月に、茨城大学近辺の小学校 2 校の教員 41 名からアンケート調査に協力をいただいた。

アンケート項目の中に、回答者の海外渡航歴の有無およびその期間、英語の好き・嫌いに関する項目が含まれた。これらの項目への回答と英語活動担当やそれに対する感じ方や考え方への回答がある程度関係があるのではないかと予想されたためである。例えば、海外渡航期間が長ければ、それだけ外国語をコミュニケーションの手段として使用している経験が豊富であり、その結果、英語活動に積極的に取り組み、英語活動を担当することをさほど負担に感じていないことが推測される。ALT との TT (team-teaching) に関する全国規模の調査(猪井他, 2001)は、海外渡航歴を有する日本人英語教師の方が無い教師よりも TT を通して英語教育観をより変化させる傾向にあると報告している。本研究においては、「海外渡航期間の長短」および「英語の好き・嫌い」の 2 項目への回答結果が、英語活動への取り組みや感じ方の回答結果と何らかの関係があるのか否かについて分析する。

結果および考察

Part 1

表 1 はアンケート回答者 41 名の背景的情報(Part1)を集計したものである。回答者の性別はほぼ同じ割合であり、年齢的には 40 才台が 24 人と過半数以上(58.5%)を占めている。担当学年はほぼ均等になっている。ほとんどの回答者(39 名)が海外渡航経験を有しており、外国語を多少なりともコミュニケーションの手段として使用した経験があることが推測される。その内の約半数(20 名)の海外滞在期間は 10 日以内であり、3 週間以上と回答したのは 12 名(約 3 割)である。英語検定等の資格試験に関しては、約 6 割が受験した経験があり、英語検定 3 級・4 級等の資格をもっていることがわかる。TOEIC に関しては 1 名が受験経験ありと回答した。

表1 Part 1 (背景的情報)

		人数	合計
1) 性別	男	20 (48.8%)	41
	女	21 (51.2%)	
2) 年齢	22~29 才	3 (7.3%)	41
	30~39 才	9 (22.0%)	
	40~49 才	24 (58.5%)	
	50~ 才	5 (12.2%)	
3) 担当学年	1 年	7 (17.1%)	41
	2 年	7 (17.1%)	
	3 年	6 (14.6%)	
	4 年	6 (14.6%)	
	5 年	5 (12.2%)	
	6 年	6 (14.6%)	
	その他*	4 (9.8%)	
4) 海外渡航歴	有	39 (95.1%)	41
	無	2 (4.9%)	
5) 渡航期間	1 日~10 日	20 (51.3%)	39***
	11 日~ 20 日	6 (15.4%)	
	21 日~	12 (30.8%)	
	不明	1 (2.6%)	
6) 英語資格受験 の有無	有	26 (63.4%)	41
	無	13 (31.7%)	
	不明	2 (4.9%)	
7) 英語資格試験名	英語検定 4 級	5 (19.2%)	26
	英語検定 3 級	14 (53.8%)	
	英語検定準 2 級	1 (3.8%)	
	英語検定 2 級	4 (15.4%)	
	英検 (級不明)	1 (3.8%)	
	TOEIC**	1 (3.8%)	
	試験名不明	1 (3.8%)	

*「その他」は
特別支援学級。

** 1 名が TOEIC と英検を両方とも受験している。

*** 海外渡航歴が無い回答者が 2 名いるため、合計が 39 となっている。

Part 2

表 2 は Part 2 (英語活動担当や英語活動に対する考え方) に関する回答結果である。

表2 英語活動担当や英語活動に対する考え方

1) 英語活動担当の有無	現在している	22 (53.7%)	41
	以前していたが、現在はしていない	4 (9.8%)	
	担当したことがない	15 (36.6%)	
2) 英語活動の形態	TTで実施している	21 (95.5%)	22
	1人で実施している	0	
	どちらとも言えない	1 (4.5%)	
3) TTにおける立場	主指導的立場	7 (17.1%)	41
	副指導的立場	26 (63.4%)	
	どちらとも言えない	2 (4.9%)	
	不明	6 (14.6%)	
4) 英語活動の負担感*	感じる	20 (48.8%)	41
	何とも言えない	7 (17.1%)	
	感じない	12 (29.3%)	
	不明	2 (4.9%)	
5) 英語の好き・嫌い**	好きである	18 (43.9%)	41
	何とも言えない	16 (39.0%)	
	好きでない	7 (17.1%)	
6) 不安要素	自分の英語力	40 (97.6%)	41
	年間指導計画・授業指導案作成	37 (90.2%)	41
	実際の英語活動の進め方	33 (80.5%)	41
	教材の開発・準備	33 (80.5%)	41
	教員研修	12 (29.3%)	41
	中学校との連携	4 (9.8%)	41
	教員同士の協力体制	4 (9.8%)	41
	その他***	1 (2.4%)	41
7) 望む研修内容	英語活動の目的	10 (24.4%)	41
	授業に必要な英会話、クラスルームイングリッシュ	38 (92.7%)	41
	英語の発音・リズム	25 (61.0%)	41
	ALTと打ち合わせができる程度の英語力	28 (68.3%)	41
	すぐ使える教材や英語活動実践例(歌・ゲーム含む)	30 (73.2%)	41
	英語活動授業案・年間指導案の作成の仕方	19 (46.3%)	41
	他の小学校の英語活動の様子、情報交換	8 (19.5%)	41
	その他**	1 (2.4%)	41

* 実際のアンケートの回答選択肢は5つであるが、表2では回答が3つにまとめられている。

** 「その他」の不安要素： ALTとコミュニケーションがはかれるか。

*** 「その他」の研修内容： 担任一人で行う英語活動の進め方

1) 英語活動担当の有無

6割以上が英語活動を現在、または以前担当したことがあると報告している一方、3割以上が担当の経験がないと報告している。文部科学省(2008, p. 3)によると、2007年度には全国の小学校の

約 97% が何らかの形で英語活動を実施していると調査結果は報告しているが、9 割を超えた小学校教員が英語活動担当の経験があるとは言えないことがわかる。平成 23 年度から小学校 5、6 年生で週一回の英語活動が必修化されるのであるが、全く英語活動を経験したことがない教員は 5、6 年生の担当を避ける可能性があることも否定できない。

2) 英語活動の形態

前問 1) で「現在、英語活動を担当している」と答えた回答者 22 名のうち、9 割以上 (21 名) が TT (team-teaching) で英語活動を実施していると答え、1 人で実施していると回答したのはわずか 1 名である。現時点では TT 依存型の英語活動実施の状況にある。

3) TT における立場

TT では 41 名中 26 名が副指導的立場で英語活動を実施している、あるいはその経験があると答えている。現状では、小学校英語活動の相当な部分が ALT 等との TT で実施されており、学級担任は副指導的立場に立っていることがわかる。ベネッセ (2006) が実施した全国規模のアンケート調査結果でも、英語活動年間時数が 15 時間未満の場合、8 割以上の学校が ALT や地域ボランティア等に依存し、学級担任が中心となっていて行っているのは 2 割程度であった。前述のように全国の 9 割以上の小学校が何らかの英語活動を実施しているとの報告がある一方で、その活動は ALT 等に相当依存しており、学級担任が 1 人で英語活動を実施している場合は少ないようである。安達 (2004) も TT において学級担任は JET プログラムや人材派遣会社の ALT に相当依存していると報告している。しかし、平成 23 年度からの週一回予定の英語活動には、ALT の訪問が毎回期待できないことを考えると、学級担任がある程度 1 人で英語活動を実施することが必須である。文部科学省も英語活動の計画や授業の実施を誰が行うかについて「学級担任の教師または外国語活動を担当する教師が行うこととし、授業の実際に当たっては、ネイティブ・スピーカーの活用を努めるとともに、地域の実態に応じて、外国語に堪能な地域の人々の協力を得るなど」(文部科学省, 2008, p. 15) と述べ、学級担任を一番先に挙げ、その重要性に言及している。英語活動を現在の TT 依存型から、徐々に学級担任単独型へ変える必要があることがわかる。当然、各教員研修会においても、そのことを考慮した教員研修内容を検討する必要がある。

4) 英語活動実施の負担感

41 名のうち約半数 (20 名) が英語活動をすることに負担を感じている。「感じない」と答えたのは 12 名 (約 30%) である。ベネッセ (2006, p. 12) の研究でも約 6 割が負担を感じ、約 4 割が負担を感じていないと、似たような傾向を報告している。さらに、英語活動の年間時数が多いと、負担感を感じる割合が若干増加するとも報告している。負担感は次の質問項目 5) 「英語の好き・嫌い」の程度および Part 1 の海外渡航期間等と何らかの相関関係があることがある程度予想される。

5) 英語の好き・嫌い

41 名のうち 18 名 (43.9%) が英語を好きであると答えている一方、7 名 (17.1%) が英語を嫌いであると答えている。上でも述べたが、このことが英語活動の負担感と何らかの関係がある可能性

があり、後で詳しく分析したい。

6) 英語活動の不安要素

圧倒的に多い不安事項は「自分の英語力」であり、1名を除きほぼ回答者全員がこれを挙げている。これまで英語をほとんど教えた経験がないため、あるいは英語活動担当経験があったとしてもTTで行っている現状を考慮すると、当然のことと思われる。次に「年間指導計画・授業指導案作成」、「実際の英語活動の進め方」、「教材の開発・準備」が続き、これら4項目がいずれも8割以上の回答者が不安要素として挙げている。これらの4項目は実際に教室で英語活動を展開することに直接的に関わる要素である。学級担任は年間指導案のもと授業指導案を作成し、授業の準備をし、自分の英語を使って英語活動を進めるからである。逆に、それ以外の要素（「教員研修」、「中学校との連携」、「教員同士の協力体制」）は英語活動の授業展開に直接関わるものではないため、不安要素として挙げる教員の割合は低いと推測される。

7) 望む研修内容

一番希望が多い研修内容は「授業に必要な英会話・クラスルームイングリッシュ」で9割以上の回答者が望んでいる。次に「すぐ使える教材や英語活動実践例（歌・ゲーム含む）」（73.2%）、「ALTと打ち合わせができる程度の英語力」（68.3%）、「英語の発音・リズム」（61.0%）と続く。いずれも、教室での英語活動実践に即役立つものを求めているのがわかる。「英語活動の目的」は重要と思われるが、わずか10名（24.4%）しか研修の内容としては望んでいない。これは教室での英語活動に直接関わっていないためであると推測される。総じて小学校教員は、英語活動を教室で実施する際に直接的に関わる内容の研修を望んでいるのがわかる。

海外渡航期間の長短とPart 2との相関関係

1) 海外渡航期間と英語活動担当経験の有無

表3は海外渡航期間の長短と英語活動担当の有無を示しているが、明確な相関関係は見られない。ただ、「担当したことがない」と報告した教員をみると、海外渡航期間が一番短いAグループ（1～10日）の方が一番長いCグループ（21日以上）より、若干割合が高い（30% > 16.7%）。海外渡航期間の長短と英語活動担当の有無には多少関係があるのかもしれない。さらに多くの教員を対象

表3 海外渡航期間の長短と英語活動担当の有無

期間	人数	現在している	以前したことがある	担当したことがない
A	20	12 (60%)	2 (10%)	6 (30%)
B	6	2 (30%)	0 (0%)	4 (70%)
C	12	8 (66.7%)	2 (16.7%)	2 (16.7%)
合計	38*	22 (57.9%)	4 (10.5%)	12 (31.6%)

A:1~10日、B:11~20日、C:21日以上

*合計が38名となっているのは、1名の海外渡航期間が不明のため表3には算入されていない。

とする調査が必要と思われる。

2) 海外渡航期間と TT 英語活動における立場

表 4 は海外渡航期間の長短と TT で英語活動を実施する際の立場に何らかの関係があるかどうかについて調べたものである。TT において主指導的立場に立っているのは海外渡航期間が長くなるにつれ、その割合が若干ながら増えていることがわかる（10% < 16.7% < 25%）。一方、副指導的立場に立つのは海外渡航期間が短いほどその割合が高くなる傾向にある（75% > 66.7% > 58.3%）。海外渡航経験が長ければ、ある程度外国語（英語含む）をコミュニケーションの手段として使用した体験を積み重ねており、渡航経験が短い人より英語活動に自信を持って取り組んでいるためと推測される。その結果として、海外渡航期間最長の C グループの主導的立場を担う割合が他のグループより若干高くなったと思われる。しかし、その割合は 25% であり海外渡航期間が長いというだけで TT において主指導的立場を担うことにはなっていない。ただ、調査人数が少ないので、さらなる調査が必要である。

表 4 海外渡航期間の長短と TT 英語活動における立場

	人数	主指導的立場	副指導的立場	どちらとも言えない	不明
A	20	2 (10%)	15 (75%)	1 (5%)	2 (10%)
B	6	1 (16.7%)	4 (66.7%)	0	1 (16.7%)
C	12	3 (25%)	7 (58.3%)	1 (8.3%)	1 (8.3%)
合計	38	6 (15.8%)	26 (68.4%)	2 (5.3%)	4 (10.5%)

3) 海外渡航期間と英語活動担当の負担感

表 5 は海外渡航期間の長短と英語活動担当の負担感を示している。英語活動を担当することが「負担である」と回答する割合は海外渡航期間が短くなるにつれて高くなっているのがわかる（65% > 50% > 25%）。海外渡航期間の期間の最も短い A グループは 6 割以上が英語活動担当に対して負担感を感じ、渡航期間が長くなるにつれその割合が減少している。一方、負担を感じないと報告しているのは海外渡航期間が「21 日以上」の C グループ（58.3%）である。やはり、海外渡航期間が長いと、それだけ外国語をコミュニケーションの手段として使用している経験が他の 2 グループより豊富なため、英語活動を担当することに負担を感じない割合が高い傾向にあると推測される。

表 5 海外渡航期間の長短と英語活動担当の負担感

	人数	負担を感じる	どちらとも言えない	負担を感じない	不明
A	20	13 (65%)	3 (15%)	4 (20%)	0
B	6	3 (50%)	1 (16.7%)	1 (16.7%)	1 (16.7%)
C	12	3 (25%)	2 (16.7%)	7 (58.3%)	0
合計	38	19 (50%)	6 (15.8%)	2 (31.6%)	1 (2.6%)

4) 海外渡航期間の長短と英語の好き・嫌いとの関係

表6は海外渡航期間の長短と英語の好き・嫌いとの関係を示したものである。英語が好きであると回答した割合が一番高いのはCグループである(66.7%)。一方、好きでないと回答した割合が一番高いのはAグループである(25%)。やはり、海外渡航期間の長短が英語の好きの度合いとある程度は相関関係があるようである。

表6 海外渡航期間の長短と英語の好き・嫌いとの関係

	人数	好きである	何とも言えない	好きでない
A	20	8 (40%)	7 (35%)	5 (25%)
B	6	2 (33.3%)	4 (66.7%)	0
C	12	8 (66.7%)	4 (33.3%)	0
合計	38	19 (50%)	6 (15.8%)	12 (31.6%)

5) 海外渡航期間の長短と不安要素

表7は海外渡航期間の長短により英語活動に対する不安要素が異なるかどうかを表したものである。海外渡航期間の異なる3グループにおいて、「自分の英語力」「年間指導計画・授業指導案の作成」「実際の英語活動の進め方」「教材の開発・準備」の4項目が共通して上位4項目を占めている。AグループとBグループは各不安要素を挙げた割合がほぼ同じようになっているが、海外渡航期間最長のCグループはやや異なる傾向を示している。例えば「実際の英語活動の進め方」を挙げる割合(50%)は他の2グループと比較すると約半分となっている。さらに、Cグループの約3割が「中学校との連携」を不安要素として挙げている。一方、AグループとBグループは「中学校との連携」を不安要素として全く挙げていない。おそらく、これはAグループとBグループの教師は教室でどのように英語活動を展開するかということに精一杯であり、中学校との連携をどのようにしたらよいかまでは考慮する余裕がないためであると推測される。

表7 海外渡航期間の長短と不安要素

不安要素	A (20人)	B (6人)	C (12人)
自分の英語力	20 (100%)	6 (100%)	11 (91.7%)
年間指導計画・授業指導案作成	18 (90%)	5 (83.3%)	11 (91.7%)
実際の英語活動の進め方	19 (95%)	6 (100%)	6 (50.0%)
教材の開発・準備	16 (80%)	5 (83.3%)	9 (75.0%)
教員研修	6 (30%)	1 (16.7%)	4 (33.3%)
中学校との連携	0	0	4 (33.3%)
教員同士の協力体制	1 (5%)	1 (16.7%)	2 (16.7%)
その他	1 (5%)	0	0

6) 海外渡航期間の長短と望む研修内容

表8は海外渡航期間の異なるグループによって望む研修内容には違いがあるかを示したものである。望む研修内容に関して、グループ間での明確な差は見られなかった。3グループに共通して最も要望が大きい研修内容は「授業に必要な英会話、クラスルームイングリッシュ」である。それ以外で50%を超えている共通する項目は「英語の発音・リズム」「ALTと打ち合わせができる程度の英語力」「すぐ使える教材や英語活動実践例」である。やはり、教室で英語活動の授業を展開するに当たって即必要な英語力や活動例を望んでいることがわかる。

3グループに共通してさほど望んでいない研修内容は、「英語活動の目的」「他の小学校の英語活動の様子、情報交換」である。ただ、「英語活動の目的」は教室でどのような活動を実施し、どのように児童が変容することを目指すかに密接に関係しているので極めて重要な項目である。目的をしっかりと把握しないと、英語活動が英語のスピーキング・リスニングの技能ばかりが強調される恐れがある。

表8 海外渡航期間の長短と望む研修内容

望む研修内容	A (20人)	B (6人)	C (12人)
英語活動の目的	4 (20%)	2 (33.3%)	3 (25%)
授業に必要な英会話、クラスルームイングリッシュ	17 (85%)	6 (100%)	12 (100%)
英語の発音・リズム	10 (50%)	6 (100%)	8 (66.7%)
ALTと打ち合わせができる程度の英語力	14 (70%)	5 (83.3%)	7 (58.3%)
すぐ使える教材や英語活動実践例 (歌・ゲーム含む)	17 (85%)	5 (83.3%)	6 (50.0%)
英語活動授業案・年間指導案の作成の仕方	10 (50.0%)	2 (33.3%)	6 (50.0%)
他の小学校の英語活動の様子、情報交換	6 (30%)	0	2 (16.7%)
その他	0	0	1 (8.3%)

英語の好き・嫌いとは Part 2 の項目との関係

1) 英語の好き・嫌いとは英語活動担当の有無

表9は英語の好き嫌いとは英語活動担当の有無を示したものである。現在英語活動を担当している割合が一番高いのは英語が「好きでない」グループ(71.4%)である。「好きである」と回答したグループのうち44.4%が英語活動を担当しているのがわかる。一方、英語活動を担当したことが無い割合が一番高いのは英語が「好きである」と回答したグループである(50%)。調査人数が少ないた

表9 英語の好き・嫌いとは英語活動担当の有無

	人数	現在している	以前したことがある	担当したことがない
好きである	18	8 (44.4%)	1 (5.6%)	9 (50%)
何ともいえない	16	9 (56.3%)	3 (18.8%)	4 (25%)
好きでない	7	5 (71.4%)	0	2 (28.6%)
合計	41	22 (53.7%)	4 (9.8%)	15 (36.6%)

めに明確なことは言えないが、現在英語活動を担当しているために、担当することに負担感を感じ、その結果をして英語を好きでないと報告している可能性がある。回答者に直接、英語が嫌いな理由の説明を求めると必要があると思われる。今後の課題と言える。

2) 英語の好き・嫌いとは TT 英語活動における立場

表 10 は英語の好き・嫌いとは TT における立場の違いを示したものであるが、明確な関係は見られない。TT において主導的立場にあると報告している割合が一番高いのは英語が「好きでない」グループである (28.6%)。副指導的立場に立っている割合が一番高いのが「どちらとも言えない」グループである (87.5%)。英語の好き・嫌いに関わらず、小学校教員は TT においては主指導的立場でなく、副指導的立場に立っている様子がわかる。

表 10 英語の好き・嫌いとは TT 英語活動における立場

	人数	主指導的立場	副指導的立場	どちらとも言えない	不明
好きである	18	4 (22.2%)	8 (44.4%)	2 (11.1%)	4 (22.2%)
何ともいえない	16	1 (6.3%)	14 (87.5%)	0	1 (16.7%)
好きでない	7	2 (28.6%)	4 (57.1%)	0	1 (14.3%)
合計	41	7 (17.1%)	26 (63.4%)	2(4.9%)	6 (14.6%)

3) 英語の好き・嫌いとは英語活動担当の負担感

表 11 は英語の好き・嫌いとは英語活動担当の負担感との関係を示したものである。負担感を感じる割合が一番高いのは英語が「好きでない」グループ (85.7%) で、一方「感じない」と回答している割合が一番高いのは英語が「好きである」グループ (44.4%) である。英語を好きでないから英語活動を負担に感じるのか、それとも英語活動を実際に担当し負担を感じ、その結果、英語が好きでないと回答しているのかは確かではないが、ある程度はこの両者には相関関係が存在するようである。ただし、英語が好きであると報告したグループも約半数 (44.4%) が英語活動をすることに負担を感じると答えており、英語の好き・嫌いがそのまま英語活動の負担感と結びついているとは言い難い。英語が好きな小学校教員であれ、英語活動という新しい活動を担当する際はその教材開発・準備等負担を感じることは当然であると思われる。

表 11 英語の好き・嫌いとは英語活動担当の負担感

	人数	感じる	何とも言えない	感じない
好きである	18	8 (44.4%)	1 (5.6%)	8 (44.4%)
何とも言えない	16	6 (37.5%)	6 (37.5%)	4 (25%)
好きでない	7	6 (85.7%)	0	1 (14.3%)
合計	41	22 (53.7%)	7(17.1%)	12 (29.3%)

4) 英語の好き・嫌いとは不安要素

表 12 は英語の好き・嫌いにより英語活動に対する不安要素が異なるかどうかを示したものである。アンケート回答者全体の結果を示す表 2 同様に、上位 4 項目は「自分の英語力」「年間指導計画・授業指導案の作成」「実際の英語活動の進め方」「教材の開発・準備」であり、英語の好き・嫌いに関わらずほぼ同じである。ただ、それ以外の不安要素（「教員研修」「中学校との連携」「教員同士の協力体制」）を挙げたのは英語が「好きである」グループにややその傾向が観察される。これらの項目は教室における英語活動の実施に直接関わる要因ではないので、英語が「好きでない」グループにとってはその優先順位が低いと推測される。

表 12 英語の好きの程度と不安要素

不安要素	好きである (18人)	何とも言えない (16人)	好きでない (7人)
自分の英語力	17 (94.4%)	16 (100%)	7 (100%)
年間指導計画・授業指導案作成	18 (100%)	13 (81.3%)	6 (85.7%)
実際の英語活動の進め方	13 (72.2%)	14 (87.5%)	6 (85.7%)
教材の開発・準備	11 (61.1%)	16 (100%)	6 (85.7%)
教員研修	7 (38.9%)	4 (25%)	1 (14.3%)
中学校との連携	4 (22.2%)	0	
教員同士の協力体制	2 (11.1%)	1 (6.3%)	1 (14.3%)
その他	0	0	0

5) 英語の好き・嫌いとは望む研修内容

表 13 は英語の好き・嫌いとは望む研修内容について示したものであるが、3グループともさほど大きな違いはない。共通して一番望んでいる研修内容は「授業に必要な英会話」であり9割以上の回答者が求めている。これは、表 12 に示されているように「自分の英語力」に不安を持っているため、それに対応するために望んでいる研修内容と思われる。次の上位項目はグループにより若干違いはあるが、「ALT と打ち合わせができる程度の英語力」「すぐ使える教材や英語活動実践」「英語の発音・リズム」であり、いずれも各々のグループで半数以上が求めている。これらの項目は英語力（とりわけ英会話力）と実際の教室での英語活動授業展開に直結するものである。3グループに共通して優先順位が低い項目は「英語活動の目的」「他の小学校の英語活動の様子」であり、実際

の教室での英語活動には直接結び着く項目ではない。ただ、英語活動の目的は回答者の研修内容としての優先順位が低いからといって、やらなくてよいものであるとはならない。英語活動の目的は学習指導要領に明記されており、それに基づいて年間指導計画・授業案が作成され、実際に授業が展開されるのであるからである。とりわけ英語活動においては、英語の音声を重視するあまり英語のリスニング・スピーキングの技能を強調しすぎて、コミュニケーションをすることの楽しさを体験させるという本来の目的が見失うことがあってはならない。

表 13 英語の好き・嫌いと思む研修内容

	好きである(18人)	何ともいえな い(16人)	好きでない (7人)
英語活動の目的	6 (33.3%)	3 (18.8%)	1 (14.2%)
授業に必要な英会話、クラスルーム イングリッシュ	17 (94.4%)	16 (100%)	5 (100%)
英語の発音・リズム	10 (55.6%)	10 (62.5%)	5 (71.4%)
ALT と打ち合わせができる程度の 英語力	11 (61.1%)	12 (75.0%)	5 (71.4%)
すぐ使える教材や英語活動実践例 (歌・ゲーム含む)	11 (61.1%)	13 (81.3%)	6 (85.7%)
英語活動授業案・年間指導案の作 成の仕方	11 (61.1%)	5 (31.3%)	3 (42.9%)
他の小学校の英語活動の様子、情報 交換	1 (5.6%)	4 (25%)	3 (42.9%)
その他	1 (5.6%)	0	0

おわりに

平成 21 年度から開始された教員免許状講習会において「小学校英語」講座の内容を検討するにあたり、事前アンケート調査を実施し 41 名の小学校教員から回答が得られた。アンケート結果を先ず項目ごとに集計したものを報告し、次に回答者の「海外渡航期間の長短」と「英語の好き・嫌い」の観点から分析した。その結果、以下のような課題が浮かび上がり、これらを解消するような研修内容が必要と思われる。

- (1) 3 割から 4 割の小学校教員は英語活動を全く担当した経験がない。
- (2) 現状では英語活動は主に TT の形式で実施され、副指導的立場に立っている教員が多い。
- (3) 約半数以上の小学校教員は英語活動を負担と感じている。
- (4) 小学校教員は「自分の英語力」も含め、「年間指導計画・授業指導案作成」「実際の英語の進め方」「教材の開発・準備」の 4 項目を不安要素としてあげており、これらの不安要素を解消するような研修内容が必要である。ただ、「英語力」の向上は短期間の研修では到底無理であり小学校

教員は英語活動の授業を通して、長い目で自らの英語力を伸ばして行く事が必要と思われる。一方、英語活動の目的についても、英会話のような英語のスピーキング・リスニングの技能を高めるのではないということも併せて理解する必要がある。

- (5) 海外渡航期間が長い人は短い人よりも、TT において主指導的立場に立つ割合が多少高くなり、英語活動の負担を感じる割合が減少し、英語が好きであると報告している。海外渡航して体験するように、教員自身が英語をコミュニケーションの手段として使用し、コミュニケーションすることの楽しさを体験することができるような「体験型教員研修」が必要である。さらには、小学校教員の海外渡航を奨励し、そのための勤務上、財政上の教育行政支援が有効であると思われる。

注

- 1) 本研究は、第 35 回全国英語教育学会鳥取研究大会（平成 21 年 8 月 8 日、鳥取大学）において口頭発表したものを加筆・修正したものである。
- 2) 『小学校学習指導要領』（2008）によると、正式名称は「外国語活動」であるが、本稿では便宜上「英語活動」という表現を用いている。

参考文献

- 安達 理恵（2004）「小学校の総合的学習の時間における英語教育・国際理解教育の実践上の課題」第 30 回全国英語教育学会長野研究大会発表要綱、pp. 588-591. 全国英語教育学会
- 猪井 新一、マホニー・ショーン、吉田 孝、板垣 信哉（2001）「中学校・高等学校の日本人英語教師と外国人教師の言語学習・指導に関する考え方の調査」平成 11 年度～平成 12 年度科学研究費補助金（基盤研究(C) (1)）研究成果報告書
- 大年 順子（2008）「小学校教員の英語教育に対する認識について」第 34 回全国英語教育学会東京大会（昭和女子大学）口頭発表資料
- 木塚 雅貴（2009）「『学習指導要領』改訂プロセスにおける文部科学行政への問題提起：小学校における『外国語活動』導入の見地から」 *The Language Teacher, Vol. 33, 2, 9-12.*
- ベネッセ教育研究開発センター（2006）『第 1 回小学校英語に関する基本調査（教員調査）』東京：ベネッセコーポレーション
- 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』

謝辞

本研究においてアンケート項目を作成するにあたり、大年順子氏（群馬県立女子大学）より研究に用いたアンケート調査資料を提供していただきました。誠にありがとうございました。さらに、お忙しい中アンケート調査にご協力いただいた小学校教員の皆様にも、厚く御礼申し上げます。

資料(アンケート)

平成 21 年度茨城大学で実施予定の教員免許更新講習会において、「小学校英語活動」の講座を設けることになりました。講座の内容を検討するに当たり、小学校の先生方が英語活動に対しどのようなお考えをもち、どのようなことを望んでいるかについて調査をしたいと思います。所要時間は 10 分以内かと思われます。お忙しい中、誠に恐縮ですが、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

なお、アンケート結果は研究以外の目的では使用されることは一切ありません。

茨城大学教育学部 英語教育講座
教授 猪井 新一(いのい しんいち)

Part 1. 先生のご自身についての質問項目

- 1) 性別 (1) 男 (2) 女
- 2) 年齢 (1) 22～29 (2) 30～39 (3) 40～49 (4) 50～
- 3) 担当学年 (1)1年 (2)2年 (3)3年 (4)4年 (5)5年 (6)6年 (7)それ以外()
- 4) 海外渡航歴 (先生はこれまで海外旅行をしたり、海外に滞在したことがありますか。)
(1) ある。(2) ない。
- 5) 質問 4)で「ある」と答えた方は、主なものについて行き先と期間についてお答えください。
行き先 期間
() ()
- 6)これまで英検や TOEIC などの英語の資格試験を受けたことがありますか。
(1) ある。(2) ない。
- 7) 質問 6)で「ある」と答えた方は、わかる範囲で合格した級または点数を記入してください。
資格試験名() 合格級または点数()

Part2. 先生の英語活動担当や英語活動に対する考え方に関する項目

- 1) 先生は現在、英語活動の授業を担当されていますか。1つ選んでください。
(1) 現在、担当している。
(2) 以前、担当していたが、今は担当していない。
(3) 担当したことがない。
(4) その他()
- 2) 前問で「現在、担当している」と答えた方は主にどのような形態で担当されていますか。1つ選んでください。
(1) 主として、TT で英語活動を行っている。
(2) 主として、1人で英語活動を行っている。
(3) TTの場合と1人の場合の両方があり、どちらとも言えない。
(4) その他()

- 3) TT で英語活動を実施する場合、先生はどのような立場で担当されていますか。 1つ選んでください。
- (1) 主として主指導的立場で担当している。
 - (2) 主として副指導的立場で担当している。
 - (3) どちらとも言えない。
 - (4) その他 ()
- 4)先生は英語活動をすることは負担に感じますか。 1つ選んでください。
- (1) とても感じる
 - (2) まあまあ感じる
 - (3) 何とも言えない。
 - (4) あまり感じない。
 - (5) 全く感じない。
- 5)先生は英語は好きですか。 1つ選んでください。
- (1) とても好きである。
 - (2) まあまあ好きである。
 - (3) 何とも言えない。
 - (4) あまり好きでない。
 - (5) 全く好きでない。
- 6) 英語活動を担当する際にどのようなことに不安を感じますか。 上位4つを選んでください。
- (1) 自分の英語力
 - (2) 年間指導計画や授業指導案の作成の仕方
 - (3) 実際の英語活動の進め方
 - (4) 教材の開発や準備の時間
 - (5) 英語活動に関する教員研修
 - (6) 中学校との連携
 - (7) 教員同士の協力体制
 - (8) その他 ()
- 7) 英語活動に関してどのような内容の教員研修を受講したいと思いますか。 上位4つを選んでください。
- (1) 英語活動の目的・意義
 - (2) 授業に必要な英会話、クラスルームイングリッシュ
 - (3) 英語の発音・リズム
 - (3) ALT と打ち合わせができる程度の英語力
 - (4) すぐ使える教材や英語活動実践例 (歌・ゲーム含む)
 - (5) 英語活動授業案・年間指導案の作成の仕方。
 - (6) 他の小学校の英語活動の様子、情報交換
 - (7) その他 ()
- 8)小学校英語活動に対して、感じること、思うことなどを自由に書いてください。